

七五三に見る通過儀礼の変容

國學院大學助教授

石井 研 士

はじめに—研究の目的

教団や教会への帰属、戒律の遵守などを基準とすると、日本人の信仰のあり方が欧米のそれとかなりの程度異なっていることは、すでに多くの研究者によって指摘されてきたことである。⁽¹⁾

日曜日ごとに教会へ行きミサや礼拝に参加したり、食前にお祈りをしたり、あるいは戒律を守ってお酒やコーヒを飲まない、タバコを吸わないといった日本人はごく少数であつて、一般的な行為といふことはできない。日本人の宗教意識と行動を、宗教団体の教義や行為規範と個人のそれとの統合の問題として考えれば、それはきわめて低い程度にとどまるということになる。

こうした点は、実体験上のみならず、調査の上からもしばしば指摘される場所である。たとえば、昭和六三年に統計数理研究所が行つた「日本人の国民性調査」の結果によると、「宗教を信じている」と回答した人の割合は三一パーセントにとどまっている。⁽²⁾ 他の機関の調査でも、日本人の宗教意識はおおよそ三〇%という結果がでてい

日本人の実際の信仰の内容や、「信仰を持っている」とする割合が、欧米各国のそれと比較して本当に低いかどうか

かは別としても、こうした数値から日本人が宗教的でないことを指摘されることは多い。

しかしながら、こうした一般的な認識とは逆に、宗教学ではしばしば日本人は宗教的であることが指摘されてきた。具体的な宗教行動においては、回答者の自覚的な宗教意識とは裏腹に、高い実施率が示されるからである。

文化庁が毎年刊行している『宗教年鑑』⁴には、日本の信者数と宗教法人数が記載されている。このデータを見ると、次のようになる。

このデータによると、神道系の信者が一億六六四万、仏教系の信者が九五七六万となっており、全体の九割以上を占めていることがわかる。そして他教団の信者も含めると、日本の宗教人口は総数で二億人を越えている、ということになる。「宗教法人数」の場合でも神道系と仏教系がとくに多くなっている。神道系は八万五七八一、仏教系は七万七五六八、他も含めると、日本の宗教法人の総数は一八万以上にもなる。

神社やお寺の数が多いことには当然ながら理由が存在する。『宗教年鑑』に記載された信者数と法人数は、基本的に教団から自主的に報告されたものである。一般的に、神社では氏子区域に住む人々を「氏子」と考えて、お寺では「檀家」を信者として報告されているためである。つまり、我々日本人は、「信仰を持っている」という、教団への帰属や統合の問題としてよりは、初詣、お盆、お彼岸、七五三、結婚式、葬儀や法事など、季節や人生の節目節目に神社やお寺と関わりを持つことになるのである。

そうした機会は、大きく分けて年中行事と通過儀礼の二つに集約することができる。七五三は通過儀礼であり、日本人が神社との関わりを持つ場合の典型的な儀礼のひとつである。

こうした点を踏まえると、七五三を研究するための、相互に関連しながら異なるふたつの視点を設定することができる。ひとつは、信仰を有していると自覚的意識的に表明することのない日本人が宗教的行動を行う典型的な事例としての七五三がどのように変化したのかを明らかにすることである。視点は日本人の通過儀礼の様式と意味の変化に

図1 我が国の信者数
(平成4年12月31日現在)

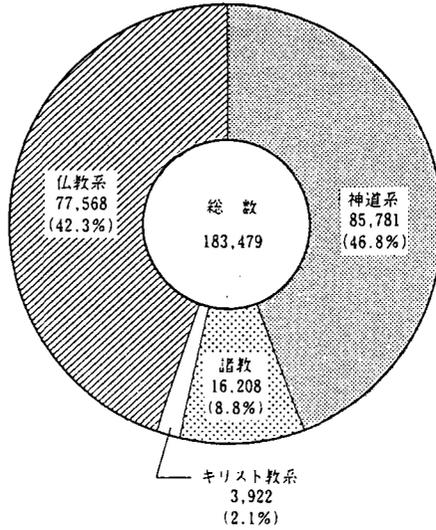
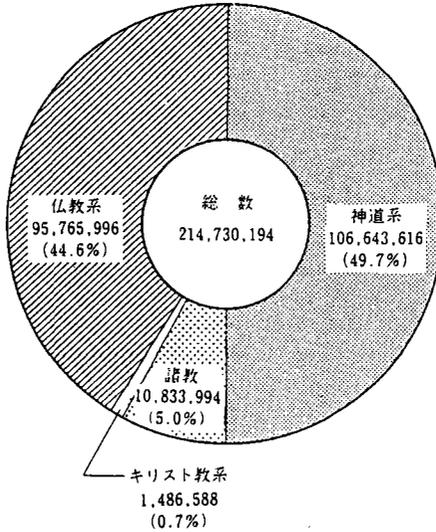


図2 我が国の社寺教会等単位宗教法人数
(平成4年12月31日現在)



ある。いまひとつは、七五三が日本人一般と神社とを結ぶ重要な儀礼のひとつであることに注目して、七五三の変化から神社の変化、もしくは日本人と神社の関係の変化を読み取ろうとするものである。本論の目的は後者の点を明らかにすることにある。

しかしながら、本論文は、上記の目的を十分に果たすまでにいたらなかった。もっとも大きな理由は上記の問題を明らかにするための十分な資料が不足しているためである。本論では、研究目的を理解いただき資料を提供していただいた四社のデータを比較検討することにとりあえず重点をおきたい。また、七五三の歴史的経緯や世相の移り変わりに関しては、稿を改めて述べたいと思う。

なお、今回資料を提供いただいたのは、明治神宮（東京都渋谷区）、神田神社（東京都千代田区）、花園神社（東京都新宿区）、稲毛神社（神奈川県川崎市）の四社である。資料提供が困難ななか、あえて資料をいただいたことを記して感謝申し上げたい。

七五三とは何か

七五三が本来どのようなものであったのかを明らかにすることが本論の直接的な目的ではないので、いくつかの文献から、七五三の概要を押さえておくことにしたいと思う。

一般的に言えば、七五三は、一月一日に、五歳の男児、三歳と七歳の女児が神社に詣でる、都市を中心に発達した通過儀礼ということが出来る。その起源としては、成人式の一段階としての氏子入りの習慣と関係があると考えられる。また、江戸時代には中国の元服の影響を受けて、男女三歳を髪置、男児五歳を袴着、女児七歳を帯解として祝う習俗が普及し、両行事が習合して今日の七五三の原型が形成されたともいう。日取りが現在のようになり一月一日となったのは、徳川五代将軍綱吉の子徳松の祝いからという説や、陰陽道でいう一陽来復の十一月の吉日とされる

鬼宿の日という説や、あるいは古来より霜月の一五日に祭が多かったからという説などがある。七五三は幼児の成長期の重要な段階に、氏神参拝して守護を祈るとともに、神からも地域社会からも社会的人格を承認される儀礼である。⁽⁵⁾

歴史的な経緯を詳細に見ていくと、七五三の日にち、年齢、祝い方にかんがりの変化があつたことがわかるが、ここでは、七五三は十一月一日に行われる、三歳と七歳の女児、五歳の男児の、社会的承認の機会という点を確認しておきたいと思う。

ところで、今日よく知られているように、七五三を祝う日にちは、十一月一日だけではない。本論で取り上げるように、現在では十一月一日前後の土曜日や日曜日に集中しているという話しはよく聞くところであるし、一月に限らず一〇月から二月まで広がりつつあるということも、関係者や当事者には衆知のことであるのかもしれない。また、七五三を行うことのできる場所も、現在は必ずしも神社だけではなく、寺院やキリスト教の教会で祝うこともできるし、新宗教の信者であれば、帰属する教団で行事が行われている。⁽⁶⁾

七五三の変化

都市を中心に氏子組織が弱体化したり、氏子意識が希薄化しているということは、これまでもしばしば指摘されてきたし、調査からも明らかにされてきた。また近年は氏子区域内の企業で神社の活動に友好的な企業も「氏子」に含めるなど、「氏子」の概念自体が従来とは異なつてきていることも衆知の事実としていいかもしれない。⁽⁷⁾ こうした中で、七五三だけがそうした変化から免れているとは考えにくい。

七五三がどのような変化をたどつたかを知るのは容易ではない。初詣のように、毎年七五三参拝の実数が報告されるわけではない。どの地域で増加しどの地域で減少したのか、その理由は何かを探ることは困難である。詳細な資料

とはいいがたいが、東京都の本務社を対象に行った調査結果から、まず最初に戦後の東京都の七五三の盛衰と地域との関係を考察してみたいと思う。

七五三に関しては、他の神社活動とともに、戦後から現在までの活動の変化、将来の変化に対する予想を五段階に分けて質問した。結果を二三区と三多摩に分けて示すと図3のようになる。

戦後七五三が「盛んになった」と回答した神社の割合は（質問中の「盛んになった」と「やや盛んになった」の合計）は、二三区で約二割、「減少」（質問中の「減少した」と「やや減少した」の合計）は約七割と、「減少」が「盛ん」を大きく上回っている。この傾向は当然ながら三多摩よりも二三区で顕著に示されている。将来に対する予想では、減少傾向はいっそう強くなると考えられていることが図からわかる。

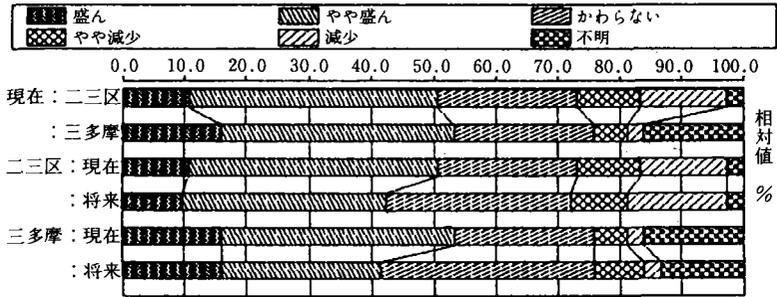
七五三の「盛ん」「減少」を、二三区のそれぞれの区と三多摩でみると図4のようになる。この図を見ると、区によってかなりの差異のあることがわかる。千代田、中央、港、文京、台東など人口減少の著しい都心の区では、圧倒的に「減少」が多い。杉並や墨田など人口が増加している区でも七五三の減少が見られる点は注目されていいだろう。この傾向は、「七五三の将来の予想」「氏子区域の尊重」に関しても同様に見られる。

日にちの拡大現象

いつ頃から七五三の日にちは現在のように拡大し始めたのだろうか。手元にあるデータは、どれも七五三が一月一五日というたった一日の行事であるよりは、一月全般に広くわたった行事であることを示している。神田神社のデータでは、一〇月と二月の件数も明示されており、一〇月もしくは一二月に七五三を行っている日本人の存在することが確認できる。

七五三がいつ頃から一五日以外の日に拡大していったかを明確にするためのデータは、現在までのところ十分に収

図3 神社活動の変化：七五三



集されていない。最も過去にさかのぼって記述のあるデータは稲毛神社のもので、昭和四四年からのデータが明らかになっている。

七五三の日にちの拡大の時期を特定するためには、初詣の場合と同様に、多くの神社でのデータが、長期間にわたって、それぞれの神社の地域的特性を踏まえて収集し分析されなければならない。ここでは目下のデータからの結論としておきたい。

昭和四四年から平成五年までの二五年間の、稲毛神社の七五三の日にち別の集中度を表したのが、図5である。

まず最初に、図に関する注意を述べたいと思う。図は七五三の件数そのものを表したのではない。件数を六段階に分け、それぞれに濃淡を加えたものである。視覚的に七五三の参拝者が多い日にちほど色が濃く見えるように作図してある。段階の設定は、七五三の参拝者数の変化が顕著になるように区切られており、神社によって数値は異なっている。たとえば、ある神社の場合の「一〇〇一〜五〇〇件」であるものが、他の神社では「五〇一〜一〇〇〇件」である、という具合である（この区分も、実際に用いられた区分でないことを断っておく）。作図の意図は、一月のどの日に、そして年とともに参拝の集中する日にちがどのように変化していったかを明らかにすることである。

稲毛神社の七五三の参拝者数の集中度の変化を見ると、昭和五〇年前後から、一五日ではなく、一五日前の土曜日や日曜日へと七五三の集中が移っていくこと

図4 戦後の変化：七五三

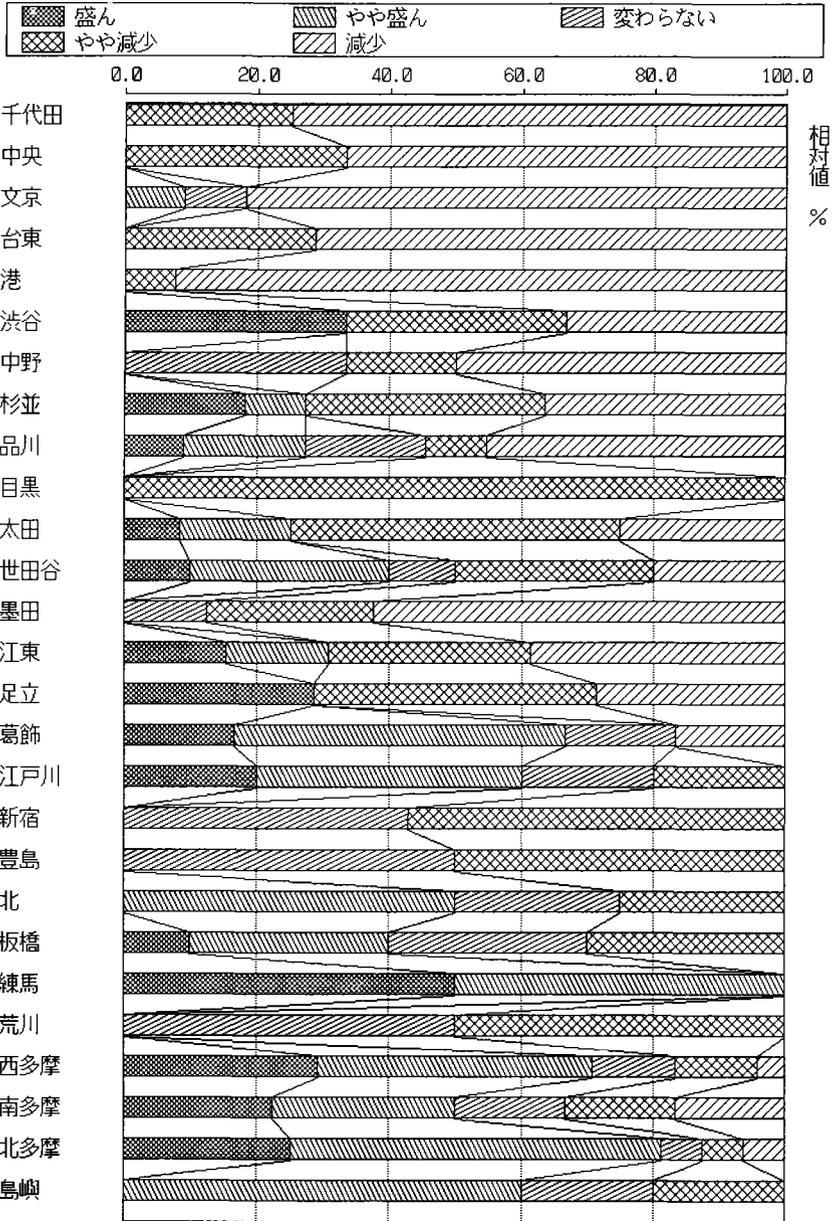
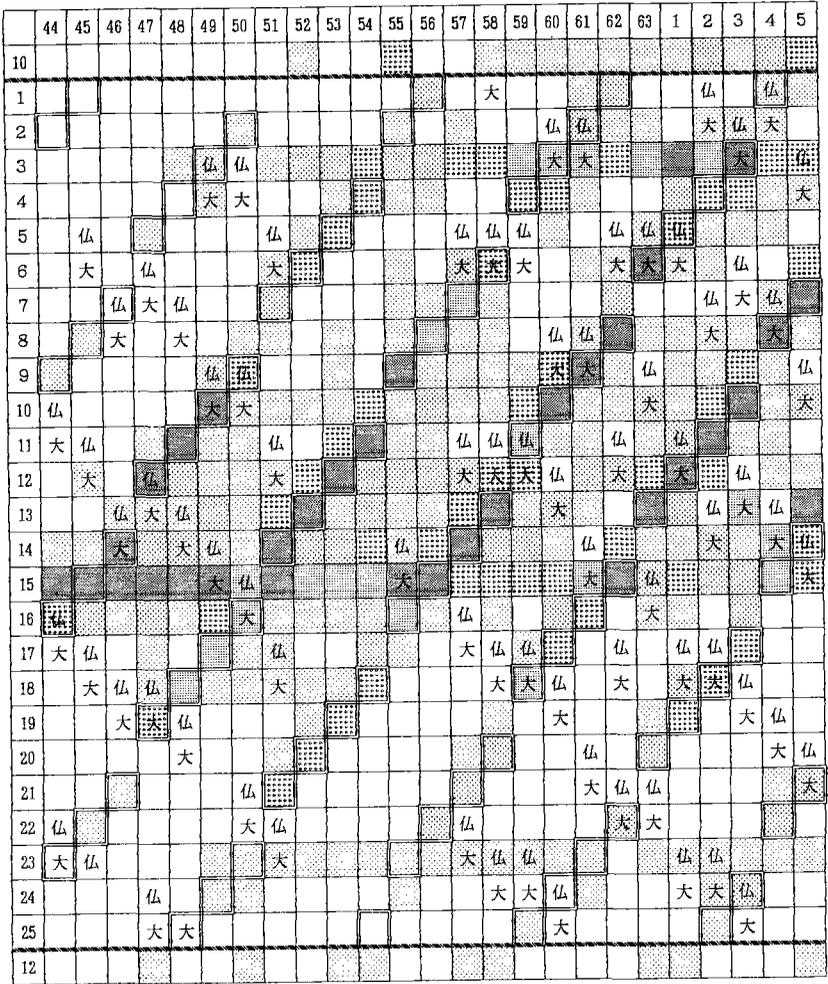
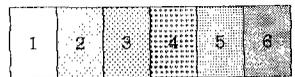


図5 七五三：日にち別集中度（稲毛神社）



集中の度合



七五三：日にち別集中度（神田神社）

	56	57	58	59	60	61	62	63	1	2	3	4
10												
1	大						大			大	大	大
2			大			大				大	大	大
3				大	大				大	大	大	
4												
5		大	大	大			大	大	大		大	
6										大	大	大
7					大	大						
8	大				大	大				大		大
9									大			
10									大			
11		大	大	大	大		大		大	大		
12											大	
13										大	大	大
14						大				大		大
15									大			
16		大							大			
17			大	大	大		大		大	大	大	
18					大						大	大
19												大
20						大						大
21							大	大				
22		大							大			
23			大	大	大				大	大	大	
24												
25												
26												
27												
28												
29												
30												
12												

七五三：日にち別集中度（花園神社）

	62	63	1	2	3	4	5
10							
1				仏		仏	
2				大	仏	大	
3					大		仏
4							大
5	仏	仏	仏				
6	大	大	大		仏		
7				仏	大	仏	
8				大		大	
9		仏					仏
10		大					大
11	仏		仏				
12	大		大		仏		
13				仏	大	仏	
14				大		大	仏
15		仏					大
16		大					
17	仏		仏	仏			
18	大		大	大	仏		
19					大	仏	
20						大	仏
21	仏	仏					大
22							
23			仏	仏			
24			大	大	仏		
25					大		

七五三：日にち別集中度（明治神宮）

	61	62	63	1	2	3	4	5
1					仏		仏	
2	仏				大	仏	大	
3	大					大		仏
4								大
5		仏	仏	仏				
6		大	大	大		仏		
7					仏	大	仏	
8	仏				大		大	
9	大		仏					仏
10			大					大
11		仏		仏				
12		大		大		仏		
13					仏	大	仏	
14	仏				大		大	仏
15	大		仏					大
16			大					
17		仏		仏	仏			
18		大		大	大	仏		
19						大	仏	
20	仏						大	仏
21	大	仏	仏					大
22		大	大					
23				仏	仏			
24				大	大	仏		
25						大		
26								仏
27								大
28				大				
29					仏		仏	
30					大	仏	大	

がわかる。日曜日が一五日から離れていくにつれて、そのまま参拝者の集中する日にちも一五日から離れていくのである。昭和四〇年代の半ば頃までは、一五日にかなりの参拝者が集中する一方で直前の日曜日にも参拝が行われていたのに対して、昭和五〇年代前後からは、一五日には参拝者が少なく、直前の日曜日に参拝者が集中するようになっている。

全体的な変化を見ながら、個別に傾向を確認していきたいと思う。

①一五日から土曜日・日曜日へ

七五三が一五日からどのような日にちへと移動しているのかを、いくつかの視点から明らかにしたいと思う。

表1は、神社別、年別に、七五三の参拝者の多い日にちを順に列挙したものである。ただし、「一五日」がベストスリーに入っていない場合には、上位二日の次に「一五日」の順番を示す番号をつけた。数値は、七五三の参拝者総数に対する割合であって実数ではない。

年ごとに見ていくといくつかの点に気づかれる。まず第一には、先の一覧表でも明らかになったことであるが、昭和四〇年代には圧倒的に一五日に七五三は集中していたのである。どの年も一五日の割合は著しく高い。昭和四四年と四五年は土曜日と日曜日にあたったためか、八割を越えている。しかしながら、その後割合は漸次減少し、昭和五年（日曜日）と昭和六二年（日曜日）にいつとき高くなるものの、全体としては減少傾向を示している。この傾向は、曜日や大安・仏滅を無視して、実施割合のグラフを作成すると、一目瞭然となる（図6参照）。

第二に注目されるのは、七五三の集中する日の割合が、年代が下るにしたがって、低くなっている点である。昭和四〇年代には、一五日など、特定の一日に極端に集中していたのに対して、しだいに多くの日に拡散していくのであ

る。

七五三の日にちがどのように変化していったのかを、曜日注意到比較してみたいと思う。曜日にこだわるのは、一五日が日曜日の場合と、月曜日のような平日では、当然ながら参拝者数に変化が生じるわけで、一五日が土曜日、日曜日、月曜日の三つの事例に分けて、図を作成すると図7～9のようになる。

三枚の図の図形を見てもまず気づかれるのは、これまでも指摘してきたように、一五日の割合の減少である。同じ曜日である年を比較しても、確実に一五日の実施割合は減少している。次に、一五日が日曜日でない場合を見ると、一五日が月曜であれば前日の日曜日に、一五日が土曜日であれば、直後の日曜日よりは日が離れても直前の日曜日に最も集中する傾向のあることがわかる。

第三に注目されるのは、図形から明らかのように、データの提供をいただいた神社の所在地や規模、性格、そして七五三の参拝者数が異なるにもかかわらず、一五日の実施割合の変化の図はまったく同じ図形を描いている点である。データが二社以上になる昭和五六年からを拡大して図示すると、図10のようになる。

要するに、七五三をいつ行うかに関しては、その神社の規模や性格、あるいは教化を含めた神社側の対応はほとんど無関係なのではないだろうか。人々が七五三を行う場合には、日にちの設定に際して、神社からの働きかけを考慮することなく行っている実体をうかがうことができる。

②三日（文化の日）と勤労感謝の日（三三日）への集中

近年の数値を見ると、日曜日以外に、三日と三三日にかなりの数の参拝者のあることがわかる。文化の日と勤労感謝の日に、いつ頃から集中してくるかはかなり明確に把握することができる。

図5から明らかのように、稲毛神社の場合には、文化の日の参拝者数は、昭和四〇年代の後半から現れはじめ、五

図6 一五日の実施割合の変化

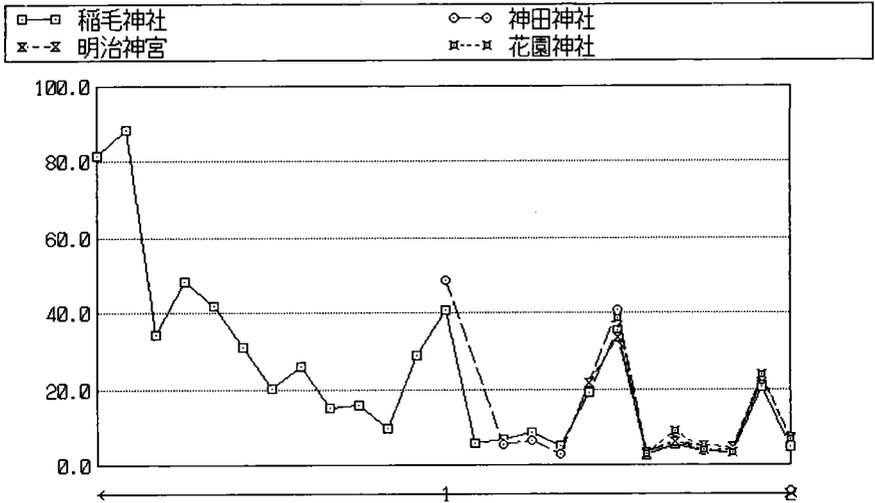


図7 集中度の変化 (土曜日)

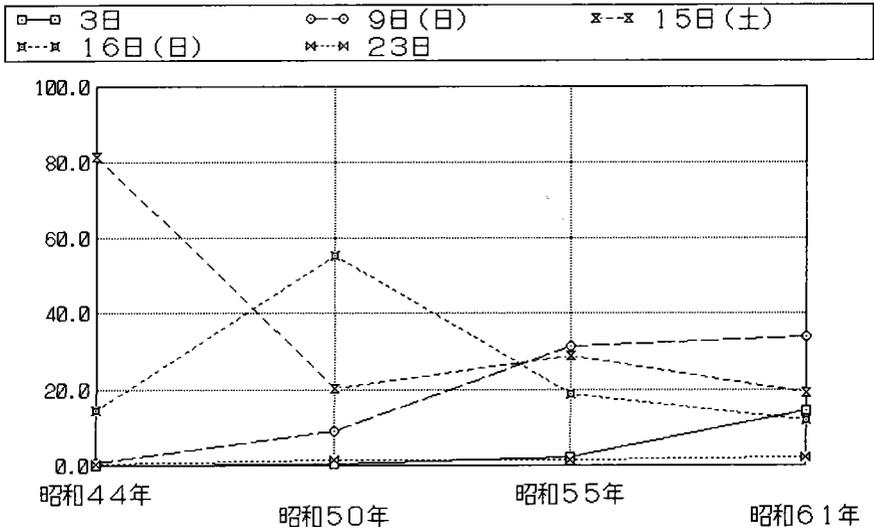


図8 集中度の変化（日曜日）

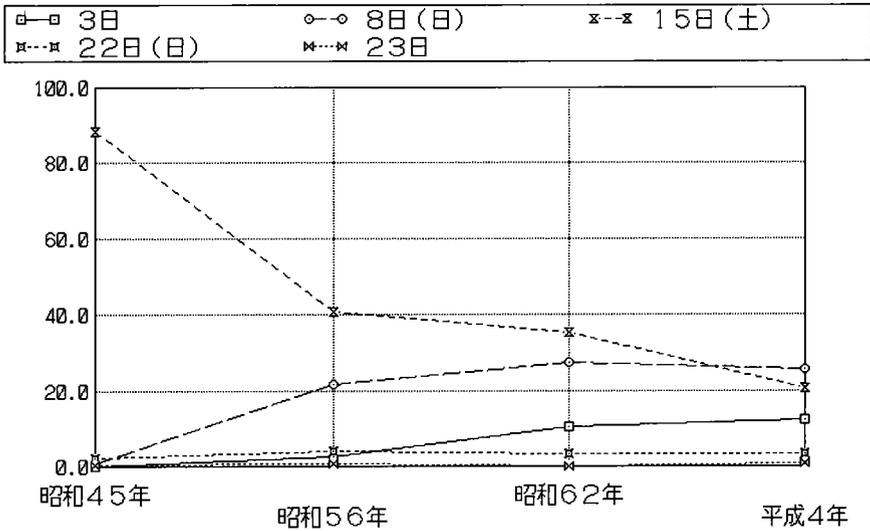
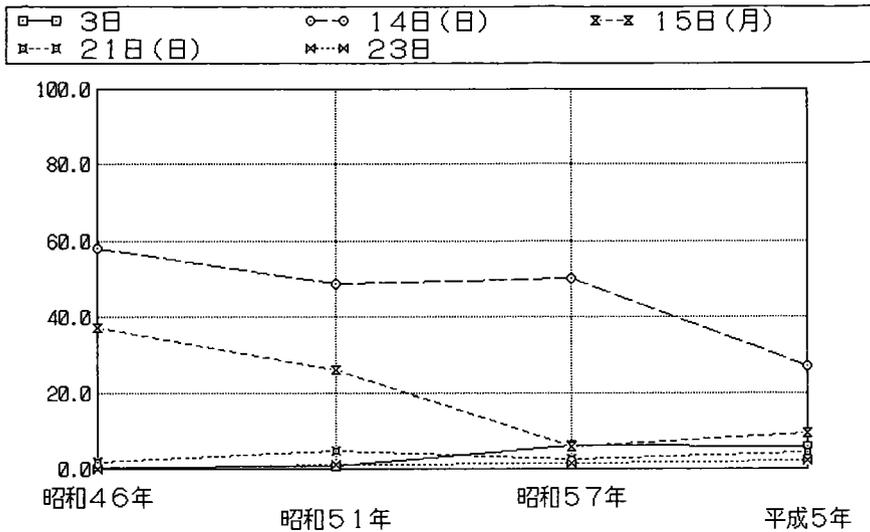


図9 集中度の変化（月曜日）



○年代の終わり頃からは定着しているように思う。勤労感謝の日も、文化の日ほどではないとしても、同じ時期から件数が増加していく。そしてこの時期は、まさに一五日への参拝者数の集中が他の日にちへと拡散していった時期である。

③一〇月と一二月への拡大

七五三の日にちの拡大は、一月中旬にとどまらない。一〇月と一二月に行われた七五三に関するデータがあるのは神田神社のものである。割合は決して多くはない。一〇月が数パーセントであり、一二月はさらに少い。それでも近年必ず参拝に来る者のいることは確かである。一〇月の場合には下旬の日曜日、一二月の場合には上旬の日曜日に集中している。

④一五日の前と後

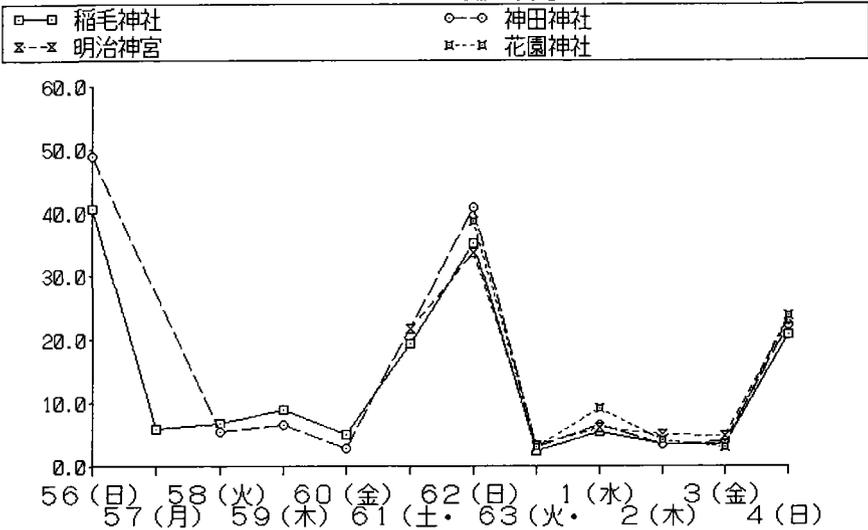
それでは一五日へのこだわりはなくなったのだろうか。これまでのデータを見ると、一五日前に参拝の比重が置かれていることがよくわかる。一五日前後の日曜日では、直前の日曜日に集中するのであって、一五日直後の日曜日はさほどでもない。一〇月と一二月では一〇月が多い。

いぜんとして、七五三は「一五日」を中心とした行事である点には変わりがない。しかしながら、一五日に固執していないことはこれまで見てきた通りである。一五日は目安としてある、という程度ではないか。

⑤大安と仏滅

大安と仏滅はどの程度考慮されているのだろうか。結婚式や葬儀など、まだまだ影響力があるといわれるが、七五

図10 一五日の実施割合の変化



三ではどうだろうか。これまでの分析を踏まえて、いくつかの条件を設定し、大安と仏滅の存在意義を考察したいと思う。

一五日前後で、土曜日・日曜日でない大安の日に七五三が行われているかどうかを見ると、一五日前に限っては、平日でも少なからぬ割合が示されていることがわかる。

仏滅に関して、日曜日と仏滅が重なった場合、三日の文化の日と仏滅が重なった場合の件数を見ると、たしかに影響を認めることができるように思う。平成五年の一月一四日(日曜日)は仏滅であった。日曜日であることが最優先されるのであれば、この日に集中するはずであるが、どの神社も前日の土曜日に最も多くの参拝があった。

しかしながら、決定的な影響力を持つとまではいえないのが実状である。七五三の場合、結婚式や葬式と異なり、大安と仏滅は、確かに目安のひとつにはなっているとは考えられるが、決定的要因ではないといえる。

⑥ 天候

天候はどうだろうか。天候と参拝者数との関係を明らかにするために、四社のデータと天候を突き合わせたが、決定的な関係を見い

だすことはできなかった。常識的に考えて、雨天は避けられるものと考えられるが、その影響がどの程度のものであるかはわからない。年ごとに条件が変わり、どの日にちにどの程度行われるかが確定していない以上、雨による影響を測定することは困難である。

いくつかの条件を考慮しながら、もちろん個々の家庭の事情も含めて、七五三が行われているのが実状である。それでも上記で述べてきたように、長い年月を見ると、昭和四〇年代に入るとすでに日にちは拡大し、五〇年代にはこの傾向が顕著になることがわかった。そしてこの傾向は所在地や神社の規模・性格とは無関係であろうことが予想される。もしこの時期に神社の側にとりたてて変化した部分がないとすれば、変化の要因は神社外に求められなければならないことになる。

すぐにも思い浮かぶのは、高度経済成長によるライフスタイルの変化、つまりマイホーム主義や私生活主義の登場であり、週休二日制の浸透という産業構造の変化とも関わっていることは十分に予想される。父親が同伴できる土曜日や日曜日の方が好まれるということは納得がいく。また、一五日が日曜日にあたる場合には、混雑を嫌ってわざと避ける家庭があるかもしれない。他にも、家族構造の変化、子供の減少が与えた影響も見逃すわけにはいかないだろう。

七五三はどのように変化したのか・七五三の現代的意味

七五三の日にちの変化を分析してきたが、こうした分析を他の行事の変化と突き合わせると、日にちの拡大がたんなる行う側の都合ではなく、神社と行う者との関係の変化を意味していることが理解される。

七五三の日にちの拡大が生じた時期は昭和五〇年前後であった。この時期に他の神社活動で大きな変化の見られる

ものに初詣がある。初詣の分析から、昭和五〇年前後にふたつの大きな傾向が顕著になることが明らかになっている。第一には、初詣者数の増加が一部の特定神社への初詣者の集中という現象によってもたらされているということ。この傾向は大都市を持つ都道府県に顕著である。第二には、その一方で、全体に占める初詣者数の少ない神社の割合が増加しているということである。

こうした現象の生じる原因はさまざまに考えることができるが、基本的には氏子の氏神離れにあると思われる。氏が氏神へと参拝する代わりに、著名な神社へと氏子区域を越えて参る傾向が、上記のふたつの現象をもたらしただけ⁽⁹⁾となる。

七五三の日にちの拡大現象も、基本的には氏子意識の希薄化によるものと考えていいのではないかと考えられるのである。

さきほど引用した東京都の氏神社(本務社)へのアンケート調査から、氏子意識の希薄化に関する質問と、戦後の七五三の活動状況に関する質問との関係を示すと表2のようになる。

このアンケート調査は、対象となる神社に回答をいただいたもので、実際の氏子意識の希薄化という事実ではなく、回答者が「希薄化した」と感じている場合の結果である。表から明らかのように、氏子意識の希薄化と七五三の減少には関係あることがわかる。

七五三の日にちの拡大現象は、むしろ氏子意識の希薄化を背景にした拡散現象と捉えるべきものであると考える。

現状の資料ではこれ以上の結論を導き出すのは困難である。七五三は、日本人と神社をつなぐ重要な行事のひとつであるにもかかわらず、七五三の歴史的動向と現状に関しては、調査資料がほとんどなく、早急に結論を出すことはできない。日にちの拡散現象の生じた時期のより正確な特定、地域的差異、初詣に見られる著名神社への集中と同様の傾向が存在するかどうか、など明らかにされなければならない点が多い。神社側の調査だけでなく、七五三に参

表2 七五三と氏子意識との関係

氏子意識 七五三の実施	増加	やや増加	変わらない	やや減少	減少
盛ん	16.7	13.3	26.7	36.7	6.7
やや盛ん	4.1	18.4	34.7	32.7	10.2
変わらない	2.5	17.5	40.0	32.5	7.5
やや減少	1.9	5.6	42.6	33.3	16.7
減少	3.5	11.8	18.8	38.8	27.1

る人々の意識や動機を調査する必要もあるだろう。

そうした点で貴重なデータが存在する。産経新聞は昭和四七年に七五三に関する世論調査を行った(表3)。これまでの分析から明らかのように、昭和五〇年前後に大きな変化が生じたとすれば、昭和四七年の世論調査は大きな意味を持つことになる。

調査結果からは、伝統的な七五三に対する意識と態度とともに、五〇年代の傾向も十分にかがうことができるように思う。問四の設問のように、「近くの氏神社でよい」とする意見が大半である一方で、「著名な神社でよい」とする回答や問三での回答に、五〇年代の傾向を読み取ることが可能であろう。

現在同じ調査を行ったらどの様な結果がでるだろうか。今後の課題としていちおう論を閉じたいと思う。

表3 七五三参りに関する世論調査（産経新聞，昭和47年11月14日）

問1	七五三のお宮参りは家庭の行事として意義のあることだと思うか、意義のあることだとは思わないか。	
	①意義のあることだと思う	58.7
	②意義のあることだとは思わない	27.2
	③なんともいえない	13.7
	④わからない	0.5
問2	どんな点に意義があると思うか	
	①三歳，五歳，七歳，とそのときどきの成長を感謝しこれからのことを神仏にいのることに	47.8
	②両親にとってもいままでの育て方にまちがいがなかったかを改めて反省する機会となることに	18.6
	③この日を待っていた親子の楽しい夢が実現することに	11.5
	④昔から伝わった日本独特の風習というところに	19.4
	⑤その他	2.6
問3	意義があると思わないのはなぜか	
	①形式的なお宮参りより三歳，五歳，七歳とその年齢にあったしつけや生活の決まりを教える方が大切	17.8
	②子ども本位でなく両親や家族が自己満足するだけだ	32.2
	③はなやかで，ぜいたくな服装コンクールになっているから	18.2
	④ただ世間がやるからやるという風習にすぎない	28.7
	⑤その他	3.1
問4	かりに七五三のお宮参りをするにしても，有名な神社に行くよりそれぞれの家庭に見合った服装で氏神など近くの神社にすればよいという人と，せっかくのお祝いだから着飾って有名な神社にお参りするほうがこどもの思い出になってよいという人がいる。あなたはと思うか。	
	①近くの神社でよい	86.5
	②有名な神社がよい	7.5
	③なんともいえない	5.5
	④わからない	0.5

- (1) たとえば井門富二夫「日本の宗教事情 総論」(井門富二夫・吉田光邦編「世界の宗教二二 日本人の宗教」淡交社、昭和四五年、二一―九二頁)、柳川敬一「宗教学とは何か」(法蔵館、平成元年)の「一 日本人と宗教」参照。
- (2) 統計数理研究所日本人の国民性調査委員会編「第5 日本人の国民性調査」出光書店、平成五年。
- (3) 朝日新聞の調査(昭和五六年)によれば、「家の宗旨は別として、いま、あなたが信仰している宗教がありますか」という間に「はい」と回答した人の割合は三六パーセント、読売新聞の調査(平成元年)によれば、「何か宗教を信じている」人の割合は二八パーセントとなっている。
- (4) 文化庁編『宗教年鑑 平成六年版』ぎょうせい、平成六年。
- (5) 「七五三参り」(『神道大辞典 第二巻』、昭和一四年)、坪井洋文「七五三祝」(『日本文化研究所編「神道要語集 祭祀篇二」 神道文化会、昭和五一年、一六六頁)、「七五三」(柳田國男監修『民俗学辞典』東京堂、昭和二六年)参照。
- (6) 仏教寺院やキリスト教教会で七五三と称して行事が行われているのは衆知の事実であるが、その意味づけは不明である。仏教に関する辞典・事典は多いが、「七五三」を扱ったものは、管見の及ぶ限り存在しない。キリスト教においても、カトリック教会の聖職者や信徒らが参加した第一回福音宣教推進全国会議が、開かれた教会づくりのために七五三の実施をうたっているが(毎日新聞、昭和六二年一月二四日)、積極的な意味づけは不明である。
- (7) 森岡清美・花島政三郎「近郊化による神社信仰の変貌」(『日本文化研究所紀要』昭和四五年)、石井研士「戦後の東京都の神社の変容の解明に向けて―東京都神社(本務社)へのアンケート調査結果から」(『國學院雑誌』第九四卷九号、平成五年)参照。
- (8) このアンケート調査は、東京都下の氏神社(本務社) 三六一社に対して、平成四年九月に行われたものである。回収率は七四・五パーセントであった。
- (9) 石井研士「初詣の実体研究序論―戦後の神社神道の変容の解明に向けて」(『明治聖徳記念学会紀要』復刊第一号、明治聖徳記念学会、昭和六三年)参照。